Pick up! THEATRE EAST

芸劇eyes／eyes plus 2023

Geigeki eyes / eyes plus 2023

ゆうめい「ハートランド」
劇団た組「綿子はもつれる」
ピンク・リバティ「点滅する女」

芸劇がお勧めする若手の才能に今年も注目！

東京芸術劇場がこれからを期待する芸劇eyes、そして芸劇eyesを経て さらに今後が楽しみなeyes plus。4月から6月に公演がある3団体、ぜひ劇場で。

スタートを飾って４月に上演されるのは、ゆうめいの「ハートランド」。結成８年目を迎える同団体は、観る人に不思議な感覚をもたらす。作家や出演者の人生に実際に起きたことと創作の巧みなミックス、また、メンバーの実父が息子役で出演するなど、フィクションとノンフィクションが拮抗するスリル。多くの演劇作品よりも直接的に俳優に影響を及ぼし、息づくような存在感を示す美術。そうした要素が、理解より先に心に共震するような切実さを感じさせる。今回は、さまざまな理由で社会に背を向けた人々が集まる山奥のコミュニティを物語の舞台にするという。キャストがまた興味深く、メンバーの田中祐希、ゆうめいではお馴染みの高野ゆらこに加え、東京サンシャインボーイズ時代から三谷幸喜作品をこまやかに体現し、舞台、ドラマの第一線で活躍を続ける相島一之、文学座準座員であり、ミュージカル「ドリームガールズ」の大役をオーディションで勝ち取った期待の若手saraら６名。２度目の芸劇登場で、新たな飛躍を見せてくれるに違いない。

５月は、今、演劇界内外から注目を集める加藤拓也が主宰・作・演出を務める劇団た組が、芸劇eyesとして初登場する。高校在学中にラジオ・テレビの構成作家としてデビューした加藤は、今年30歳という若さながら、昨年、テレビドラマ「きれいのくに」で市川森一脚本賞を受賞、演出した「もはやしずか」と「ザ・ウェルキン」でも第30回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞し、前回の劇団公演「ドードーが落下する」では第67回岸田國士戯曲賞の最終ノミネート候補となるなど、順調に足跡を残している。上演作「綿子はもつれる」は、すでに何度か加藤の舞台に立っている安達祐実を主演に迎え、平原テツ、鈴木勝大ら、繊細な演技に定評のある俳優達が、人間が自分でも見ないように一番奥に隠している黒いものをさらりと取り出し人目にさらしてしまう加藤の世界を届けてくれるだろう。

そして６月に控えるのは、こちらも芸劇eyesとして芸劇初登場のピンク・リバティ「点滅する女」。主宰の山西竜矢は、同ユニットを2016年に旗揚げし、これまでに６作品を作・演出する一方、映画監督としても活動、2021年公開の「彼女来来」はジャパン・カッツ2021 Next Generation部門 大林賞受賞並びにMOOSIC LAB [JOINT] 2020-2021準グランプリ含む全三冠を受賞した。ピンク・リバティの作品も、豊かなニュアンスを含んだ間やしぐさ、映像的な構図が特徴的。「点滅する女」は新作で、森田想、岡本夏美らキャストも決定。公演を楽しみに待ちたい。

文：徳永京子（演劇ジャーナリスト）

芸劇eyes
芸劇が注目する才能たち、

eyes plus
いつもと違う、をプラスする。

eyes plus

ゆうめい「ハートランド」
4月20日㊍～30日㊐
シアターイースト 詳細はP8へ
作・演出：池田亮

©山岡泰治

芸劇eyes

劇団た組「綿子はもつれる」
5月17日㊌～28日㊐
シアターイースト 詳細はP10へ
作・演出：加藤拓也

芸劇eyes

ピンク・リバティ「点滅する女」
6月14日㊌～25日㊐
シアターイースト 詳細はP12へ
作・演出：山西竜矢

今後のラインナップ

eyes plus

タカハ劇団「ヒトラーを画家にする話」
9月28日㊍～10月1日㊐

芸劇eyes

ほろびて「シー・パラダイス（仮）」
2024月2月2日㊎～11日㊐

Pick up! PLAY HOUSE

NODA・MAP第26回公演
「兎、波を走る」
作・演出：野田秀樹

潰れかかった遊園地で、人は何を観るのか？

昨年『Q』：A Night At The Kabukiのワールドツアーを成功させたNODA・MAP。 6月にお目見えする、その新作は『兎、波を走る』。なんとも胸躍るタイトルだ。

観に行った芝居に強い感動や衝撃を覚え、終演後しばらく席から立ち上がれないことがある。たとえば、NODA・MAPの『エッグ』や『逆鱗』『Q』：A Night At The Kabuki、あるいは『THE DIVER』を最初に観た時もそうだった。物語が進むにつれ、表層とは違う世界が姿を現し、それが現実の出来事と繋がった瞬間の戦慄たるや。最後には、思いもよらなかった場所に佇み、しばし呆然とするほど心を鷲掴みにされている自分に気が付く。

その最たるものが、2021年のNODA・MAP作品『フェイクスピア』だった。未曽有の航空機事故を懸命に回避しようとした人々のリアルな言葉を、そのまま舞台にのせるという野田秀樹の発想には、驚嘆を通り越し、度肝を抜かれた。しかもそれを、演劇ならではの方法で表現し、「生きろ」というメッセージに貫かれた珠玉の作品へと昇華させたのだから、その手腕にも、それを体現した俳優陣にも、敬服せずにはいられない。『兎、波を走る』は、そんな『フェイクスピア』に続く野田の2年ぶりの最新作だ。まずは、これまでとは違った趣のタイトルに興味をそそられるが、野田によれば、故事ことわざにはあまり関係ないのだそう。大枠のモチーフは『不思議の国のアリス』で、潰れかかった遊園地で繰り広げられる劇中劇（ショー）のような話になるという。劇作家も二人登場するらしい。

キャストも魅力的だ。まずは、難役を見事に演じきった『フェイクスピア』に続いて、2度目のNODA・MAP出演となる高橋一生と、昨年の『Q』再演に続いて、7度目の出演となる松たか子。直近の作品に出演した俳優を、珍しく立て続けにキャスティングした野田には、この二人で描きたい何かがあるのだろう。

そして、NODA・MAP初参加の多部未華子と大鶴佐助、6度目の出演となる秋山菜津子と大倉孝二、99年の『半神』以来、24年ぶりの出演となる山崎一。ちなみに、多部は松尾スズキ演出の『農業少女』(2010年)で山崎と共演、大鶴は昨年、杉原邦生が演出した『パンドラの鐘』に出演しているので、野田の戯曲は全員が経験済みだ。もちろん、野田本人と、野田ワールド構築に欠かせないアンサンブルメンバーも出演。クリエイティブスタッフとして、人形劇師の沢則行と、映像作家の上田大樹が新たに参入する点にも注目したい。

さて、「書いておかなければと思うことがある」と語っていた野田は、この顔ぶれでどんな世界を創出し、どんな“思いもよらぬ場所”へと連れ去ってくれるだろう？ そもそも野田作品自体、遊園地のジェットコースターに似てはいまいか。嬉々として乗り込み、振り落とされないように目まぐるしい展開を楽しむうちに、新たな光景が広がり、一周して戻った頃には景色が一変している……そんな唯一無二のジェットコースターに。

昨年、劇作家・演出家人生50年を迎えた野田。稀代の演劇人と同時代に生き、その新作が味わえる幸運に感謝しつつ、6月の開幕を心待ちにしよう。

文：岡崎香（演劇ライター）

6月17日㊏～7月30日㊐　プレイハウス 詳細はP12へ

作・演出：野田秀樹
出演：高橋一生　松たか子　多部未華子
秋山菜津子　大倉孝二　大鶴佐助　山崎一　野田秀樹

秋山遊楽　石川詩織　織田圭祐　貝ヶ石奈美　上村聡　白倉裕二
代田正彦　竹本智香子　谷村実紀　間瀬奈都美　松本誠　的場祐太
水口早香　茂手木桜子　森田真和　柳生拓哉　李そじん　六川裕史

東京公演チケット一般発売：5月28日㊐
大阪、博多公演あり

NODA・MAP公式ホームページ：**https://www.nodamap.com/**

＊新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に変更がでる場合がございます。最新情報は、東京芸術劇場ホームページ等でご確認ください。